

# 万葉集の「沫雪」

財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所

井 上 さやか

## 一、はじめに

文学における自然は、言葉によってすくい上げられることで存在する。これはいわば「二次的な自然」<sup>①</sup>である。『万葉集』における自然の表現は、一首一首の詠まれた時代や歌作者によって様々な様相を呈しているが、そのなかで、四季分類による歌巻である巻八・巻十に収められた歌々に現れた季節感<sup>②</sup>は、上代の倭歌における自然表現の端的な例といえる。そうした自然のありようを表現することによって自覚されていくのが季節感であろうし、ならば季節と自然表現とは不可分な関係にあると考えられる。

そうした観点から、集中の四季分類歌巻の歌をみると、「風」や「雪」「雨」などがより細かく区別されてそれぞれ違う名を付される例があることが注意され、特に「沫雪」という語について、集中に十五例があるうち、十四例が四季分類の歌巻に収められていたことが注目される。

そこで本稿では、四季分類の歌巻から「沫雪」という一語を取り上げて、『万葉集』の自然表現について考えてみることにしたい。「沫雪」の歌の全用例は次の十五例である。

- 1 駿河采女歌一首  
沫雪香 薄太礼尔零登 見左右二 流倍散波 何物之花其毛  
あわゆきか はだれにふると みるまでに ながらへちるは なにのはなそも  
(8 一四二〇)
- 2 大伴宿祢村上梅歌二首  
含有常 言之梅我枝 今旦零四 沫雪二相而 将レ開可聞  
ふみりと いひしうめがえ けさふりし あわゆきにあひて さきぬらむかも  
(8 一四三六)
- 3 大宰帥大伴卿冬日見雪憶京歌一首  
沫雪 保杼呂保杼呂尔 零敷者 平城京師 所念可聞  
あわゆき ほとろほとろに ふりしげば ならのみやこし おもほゆるかも  
(8 一六三九)
- 4 角朝臣廣辨雪梅歌一首  
沫雪尔 所レ落開有 梅花 君之許遣者 与曾倍弓牟可聞  
あわゆきに ふらえてさける うめのはな きみがりやらば よそへてむかも  
(8 一六四一)
- 5 紀少鹿女郎梅歌一首  
十二月尔者 沫雪零跡 不レ知可毛 梅花開 含不レ有而  
しはすには あわゆきふる と しらねかも うめのはなまき、 ふみぬらずして  
(8 一六四八)
- 6 大伴坂上郎女歌一首  
沫雪乃 比日續而 如此落者 梅始花 散香遍南  
あわゆきの このころつぎて かくふらば うめのはつはな ちりかすぎなむ  
(8 一六五二)
- 7 大伴田村大娘与妹坂上大娘歌一首  
沫雪之 可レ消物乎 至レ今尔 流經者 妹尔相曾  
あわゆきの けぬべきものを いままでに ながらへゆるは いもにあはむとそ  
(8 一六六一)

8 大伴宿祢家持歌一首

沫雪乃あわゆきの 庭尔零敷にはにかりしき 寒夜乎さむきよを 手枕不たまくらまがず 纏ひとりかかぬむ 一香ひとりがかかぬむ 聞将宿

(8 一六六三)

梅枝尔うめがえに 鳴而移徙なきてうつろふ 鶯之うぐいすの 翼白妙尔はねしろたへに 沫雪曾落あわゆきそふる

(10 一八四〇)

9 卷向之まきむくの 松原毛末ひばらもいまだ 雲居一者くもあねは 子松之末由こまつがうれゆ 沫雪流あわゆきながる

(10 二三三四)

10 沫雪者あわゆきは 今日者莫零けふはなふりそ 白妙之しろたへの 袖纏将そでまきほむ 干ひともあらなくに 人毛不ひと毛不 有君有君

(10 二三三一)

11 吾背子乎わがせこそ 且今々々いまかいまかと 出見者いでみれば 沫雪零有あわゆきふれり 庭毛保杼にはもほどろに 吕尔呂尔

(10 二三三三)

13 詠黄葉

八田乃野之やたのの 浅茅色付あさぢいろづく 有乳山あちちやま 峯之沫雪みねのあわゆき 寒零良之さむくふるらし

(10 二三三二)

14 阿和雪あわゆきは 千重零敷ちへにふりしけ 戀為来こひしくの 食永我けながきは 見みつつの 偲ほむ

(10 二三三四)

15 娘子臥聞夫君之歌從枕擧頭應聲和歌一首

烏玉之ぬばたまの 黑髮所くろかみぬれて 沾而あわゆきの 沫雪之ふるにやきます 零也来座ここだこふれば 幾許戀者幾許戀者

(16 三八〇五)

今案此歌其夫被使既經累載而當還時雪落之冬也因斯娘子作此沫雪之句歟

十五例中十四例までが「沫雪」と表記している。漢字の「沫」そのものは「泡」の意であることから、一般に

「泡のような雪」と解釈される。注釈書では、「白く細かい泡のような雪」<sup>(4)</sup>、あるいは「はらはらと降る泡状の雪」<sup>(5)</sup>

などとされており、「泡」という点は一致しているものの、「泡のような雪」とはどんな雪なのか判断としない。ま

た、2・4・6にみられる「梅」との取り合わせは、「沫雪」の語を含む自然表現の型の一つとなっていると思わ

れるが、単なる「雪」と「梅」の取り合わせと同様とするのには疑問も残る。

このような視点から、集中の「沫雪」について考えてみたい。

## 二、「アワ」と「沫」

まず、「沫雪」の意味について考えておきたい。「沫雪」とはどのような雪なのであろうか。

二十卷本『倭名類聚抄』には、「沫雪」という項目がある。

日本紀云沫雪「阿和由岐」其弱如水沫

(『倭名類聚抄』天地部風雪類)

「沫雪」とは「水沫」のような弱いものだといっているのである。中古以降の和歌に「淡雪」という語の使用例があり、これは「春先に降る消えやすくはかない雪」のことをいう<sup>⑤</sup>。これを踏まえてか、「泡のように消えやすい雪」という解釈もされている<sup>⑥</sup>。前掲の7では「沫雪」は「可消物」<sup>けぬべきもの</sup>にかかる枕詞であり、たしかに「消えやすい」との意味がとれる。しかし、他の十四例では「消えやすい雪」という意味では十分に理解できない。

上代の「沫雪」の場合は、14にある「阿和雪(アワユキ)」という例を参考にとすると、「淡雪(アハユキ)」とは「ワ」と「ハ」の違いがあり、同じ語とはいえないと指摘されている<sup>⑦</sup>。「水沫」ははかないものの代名詞であるため、「沫雪」も「淡雪」もほとんど同じ意味になってしまい、語の違いが明確にならない。しかも、「淡雪」は多くの場合、春の雪を指すが、集中の用例では、3〜8・10〜14の十一例が「冬」として分類されている上に、「春」に分

類された1・2・9の三例も、「花」「咲く」「鶯」などの語に引かれて分類されていると思われる、歌作者自身は「沫雪」を「冬」のものと認識していた可能性が高い。5には「十二月尔者沫雪零跡」ともあり、冬の景物として認識されていたことがわかり、15の左注には、「沫雪」の句から、冬に作られた歌かとする注者の意見が書かれているからである。

『倭名類聚抄』の編纂された平安期には、すでに消えやすくはかない「淡雪」の用例が一般的であったと考えられ、この語釈もそうした通例から述べられた可能性が高いといえる。

また、『倭名類聚抄』に引かれた『日本書紀』の用例をみると、「水沫」のように弱いものという意味は見出し難い。

16 蹈堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、「蹴散、此云俱穢籛邏箇須。」奮稜威之雄誥、「雄誥、此云鳴多稽肩。」発稜威之噴讓、「噴讓、此云萃盧毗。」而徑詰問焉。  
〔『日本書紀』神代上、第六段本文〕

『日本書紀』の「沫雪」はこれ一例である。同じ挿話での用例が『古事記』にもみられ、どちらも、スサノオが堅い土を「沫雪」のように蹴散らしたという様子が描かれる。さらに『古事記』の歌謡には音仮名による表記例もある。

17 ……多久豆怒能 斯路岐多陀牟岐 阿和由岐能 和加夜流牟泥遠…  
〔『古事記』上巻、歌謡4〕  
18 ……阿和由岐能 和加夜流牟泥遠 多久豆怒能 斯路岐多陀牟岐…  
〔『古事記』上巻、歌謡6〕

17・18の例では「阿和由岐」と表記され、これもアワユキの音を示している。この歌謡では、「沫雪」が「和加

夜流牟泥（若やる胸）」にかかる枕詞となっており、やわらかさによるイメージの重なりが生んだ表現であったと想像することができる。

このことから、「カタ（堅）」の対義語として「アワ」が用いられているといえる。ここでの「アワ雪」の意味は、漢字の字義どおりの「水沫」のように消えやすくはかないという意味ではなく、「アワ」という倭語による「やわらかい雪」という意味を表すと考えられる。

集中でも、「片緒」<sup>カタツ</sup>（12三〇八一）に対する「沫緒」<sup>アワツ</sup>（4七六三）の例がみられ、「アワ」を「沫」の字で表していることと「やわらかい」という意味が共通している。その一方で、集中での「沫」の表記例は、先にあげた十四例と「アワ緒」を除いたほかに七例がある。一例は「泡沫」<sup>アワ</sup>（5八八六題）で、題詞中の例であり漢語をそのまま用いているとみられる。残りの六例（5九〇二、6九二二、7二二六九、一三八二、11二七三四、18四一〇六）はすべて「水沫」であり、「水泡」の意味である。いずれの場合も、「沫」は本来の字義で用いられており、やわらかいといった意味はない。むしろ壊れやすい、消えやすいという意味で詠まれている。「沫」には、字義のとおり「泡」と倭語としての「アワ」との二義性があるといえよう。

これを踏まえつつ、歌に即して「沫雪」の語の意味を検討していくことにする。

### 三、「沫雪」と「梅」

ここでは、「沫雪」を含む表現の型をみておこう。特徴的なのが、「沫雪」と「梅」の取り合わせの表現である。「雪」と「梅」の取り合わせは、天平期に好まれた表現であるといえ、集中では単純に二語を含む歌だけを数えても二十六例があげられる。このため、「沫雪」も「雪」と同じ意味と解釈されている。<sup>10)</sup>

外来植物であった「梅」は、集中では天平二年の「梅花宴歌」(5・八一五〜四六)と前後して詠まれ始める。「梅花宴」は大宰府において開かれた先進的な文雅の宴であった。「梅」そのものが中国から輸入された珍しい植物であり、「雪」と「梅」の取り合わせは漢籍の用例を踏まえているとされる。<sup>11)</sup>漢籍の用例を踏まえた「雪」と「梅」の取り合わせが、実景というよりは「梅」を素材とする文雅の宴に欠かせなかつた表現であると理解できる。「梅花宴歌」以外の巻八・巻十の「雪」と「梅」の取り合わせ表現をみても、主に同じ趣向であり、天平期の特徴的な表現としてあげられる。

1の例では、「沫雪」の降る様子を「流なが倍がら散へ波ちる何物はなに之花はな其毛そも」と表現している。この「花」が何か明確には示されていないが、諸注釈書によれば「梅」を暗示しているという。1の表現を「梅花宴歌」の例と比較してみると、色の重なりから降る「沫雪」を散る「花」とみなしているため、「花」はたしかに「梅」と考えられ、「梅花宴歌」の趣向に通じているといえる。

しかし、「雪」と「梅」との取り合わせは白色を重ねあわせることに焦点があるのであるが、「沫雪」の場合は、色を詠むことはせず、花を咲かせたり散らせたたりするものとして詠出されていることが注意される。

ほかに「沫雪」と「梅」の取り合わせがみられるのは、2・4・6・9の歌である。2・4では「梅」の花を咲かせるものとして、6では散らせるものとして「沫雪」が詠まれている。5は、十二月は「沫雪」が降るというのに待ちきれずに「梅」が咲くことだと、早すぎる開花をいうために詠み込んでいるだけであるが、開花との関連という意味では2・4に通底しているといえる。いずれも白色にちなんだ取り合わせ表現とはいえない。9は「梅」とともに「沫雪」が詠まれさらに「鶯」を取り合わせているが、これも白色の取り合わせを詠んでいる例ではないと思われる。

では、「沫雪」が花を咲かせ散らせるというような表現がみられることについて、どのように考えればよいのであろうか。同じような働きを、多くの場合「雨」や「露」、「霜」などが果たしていることが注目される。

巻十の作者未詳歌である13にも、「沫雪」によって「浅茅」が「色付」ことが詠まれている。この取り合わせは集中に一例だけで慣用化されてはいないが、「時雨」「露」「霜」などによって「色付」というのは常套表現である。

19 鍾礼能雨 しづれのあめ  
無間零者 まなくしふれば  
三笠山 みかさやま  
木末歴 こむれあまねく  
色附尔家里 いろづきにけり

(秋雜8・一五五三)

右の例のように、「しづれ」は、葉を色づかせるものとして詠まれる。この「しづれ」の働きの捉え方に13の例との類似点が見出されるといえよう。

また、同時に葉を散らせる契機とも認識されていた。

20 皇之おほきみの 御笠乃山能みかさのやまの 秋黄葉あきぢばは 今日之鍾礼尔けふのしぐれに 散香過奈牟ちりかすきなむ

(秋雜8・一五五四)

このような働きは、6の「梅」を散らせる「沫雪」の表現と似通っているといえる。これらの「時雨」の例もまた四季分類歌巻に多く、集中三十七例の内、巻八に九例、巻十に十七例がある。そして、巻八の例はすべて天平以降の作と考えられ、このほか「露」「霜」などいずれの例でも「色付」という語を用いる場合は、天平期以降の作に限られるとい<sup>12</sup>ってよい。

特に「浅茅」の「色付」ことを詠む例は少なく、集中に六例のみで、すべて四季分類歌である。そのうち、巻八の二例は聖武天皇歌(8一五四〇)と安倍虫麻呂歌(8一五七八)であり、ともに天平期の作といえる。残りの四例は巻十の作者未詳歌であって作歌時期を特定できないが、巻八の例から「浅茅」を季節に密着した景物として取り合わせることに<sup>13</sup>ついては天平期の意識と考えてよいのではなからうか。6は坂上郎女の作であるので、13の用例も天平期の特徴的な表現であるといえるであろう。

1の「沫雪」を「(梅)花」と見紛うという詠みぶりはともかく、2・4・5・6の例は「沫雪」を単なる「雪」とは違う角度で捉えて表現していたと考えられる。「沫雪」と「梅」の取り合わせは、「雪」と「梅」の取り合わせとは別の意図による表現であったといえよう。

「沫雪」という熟語は、管見では主な漢籍に例がない。ただし、似た「沫雨」という語の例はある。これは驟雨に水溜まりが泡立ち溢れ流れることとされる<sup>14</sup>。また、「雪」は、「氷雨」であるとされる<sup>15</sup>。「氷雨」とは氷雨のこと

である。これらを踏まえて「沫雪」を「泡立つように勢いよく降る雪（氷雨）」と仮定してみると、2・4・6の「梅」との取り合わせで、花を咲かせたり散らせたりするといった「時雨」「露」「霜」などと似た働きをするものとの表現の類似が理解できるように思われる。

また、「梅」との取り合わせではないが、11は「沫雪」が降るとぬれるので、袖を乾かしてくれる人もいない今日は降ってくれるなど歌いかけている。これも衣服をぬらすものという意識から詠まれていると考えられる。

15は、悪天候をおして逢いに来てくれた夫君の愛情に感動しているさまが、「沫雪」によって黒髪が濡れていることによって表現されている。「沫雪」が「氷雨」とすれば、「黒髪所<sup>くろかみぬれて</sup>沾<sup>ぬ</sup>而<sup>り</sup>」という表現も理解できる。「雪」が降っていれば、髪にも雪そのものが降りかかり残っているであろうが、「氷雨」であれば芯から冷たく髪をぬらす。この直前の三八〇四番歌とあわせて、新婚すぐに公務によって離ればなれになってしまった男女の物語が形成されているわけだが、そうした「沫雪」をおして再会を果たすというところに歌群の眼目があるといえる。

こうしてみると「沫雪」は、「アワ」という倭語を「沫」の字で表し、その用字から、字を重視した「泡立つように勢いよく降る氷雨」という意味が付加され、「しぐれ」に類似した表現型にも発展していったと考えられる。

#### 四、「沫雪」と冬の平城京

次にもうひとつ、特徴的な表現に注目しておきたい。それは3の同伴旅人歌の例である。

3は、「平城京師所念司聞」とあるので、平城京を離れていた時期に詠んだ歌であるとわかる。旅人は神龜五年(七二八)頃から天平二年(七三〇)頃まで大宰帥として大宰府に赴任しており、この歌の題詞に「大宰帥大伴卿冬日見雪憶京歌」とあることから、3もこの時期に詠まれた歌と考えられる。

しかし、この歌で「沫雪」が「保杼呂保杼呂尔零敷」けば、なぜ「平城京師」が思われるのか、この結びつきの意味は判然としない。

大宰府において、平城と同じように降り敷く雪を見て望郷の念を催したという説と、平城と違って筑紫は雪が少ないのに雪が降り続くので望郷の念を催したという説<sup>(6)</sup>などがあり、見方も様々である。「沫雪」をどのようなものと捉えるかで、歌の解釈が違っているといえるであろう。

「保杼呂保杼呂」はこの歌のみにみえる語であるが、ホドロは五例ある。

- 21 夜之穂杼呂 吾出而來者 吾妹子之 念有四九四 面影二三湯 (4七五四)
- 22 夜之穂杼呂 出都追來良久 遍多數 成者吾胸 截焼如 (4七五五)
- 23 秋田乃 穂田平鴈之鳴 閨尔 夜之穂杼呂尔毛 鳴渡可聞 (8一五三九)
- 24 夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良尔 三雪落有「二云 庭裳保杼呂尔 雪曾零而有」 (10三三一八)

これらと「沫雪」を含む12の五例である。

21〜23の家持歌二例と聖武天皇歌は「夜之穂杼呂」を詠んでいる。語義未詳ではあるが、24の二云の例に「庭裳

保杼呂尔ほとろに」と庭に雪が降る様子が詠まれ、24の本支歌の「庭毛薄太良尔にはもほたらに」と対応している。ハダラは1にもハダレと用いられていたが、まだらという意味であるので、ホドロも同様の意味であると解釈できる。21～23は、夜がまだらになる頃という意味で明け方のことをいうかと思われる。12の例も「庭毛保杼呂尔にはもほとろに」とあり、「沫雪」がまだらに積もった様子を詠んだと考えられる。

3の場合は、「保杼呂ほとろ」を二回繰り返すことでリズムがうまれている。旅人はこうした畳語を使用することがあり、「曲曲まがまが」(3333)の例などがある。これも望郷歌であり、「浅茅原」が望郷の念を起こす契機として描かれている。3では「沫雪」がまだらに降り重なっていく様子を眺めながら長時間物思いに耽っている様子が伝わる。それが契機となって平城京への思いがかきたえられるというのである。ここで「雪」ではなく、あえて「沫雪」という語を選択した意味は何だったのであろうか。

旅人は前掲の「梅花宴」の主催者であり、大宰府においていち早く最新の文化を取り入れて歌を作っている歌人である。その際には「雪」と「梅」の取り合わせ表現を楽しんでいた。これは漢籍の「梅」の表現を倭歌として取り込む趣向であったし、同じ趣向は『懐風藻』の旅人詩にもみられる35。しかし、3は「梅」との取り合わせではない。

そこで、巻十の作者未詳歌群の「梅」と結びつかない「沫雪」の歌々に注目しておこう。

10は柿本人麻呂之歌集歌である。奈良県桜井市のあたりに相当する巻向の桧原が詠まれており、そこにもまだ雲はかかっているのに、「沫雪」が降ると詠んでいる。13の八田の野も奈良県大和郡山市矢田が比定されていて、

その浅茅が色付くさまを根拠に、愛発の関のある愛発山に「沫雪」が寒く降っているらしいと詠む。どちらも大和国内の景を詠んでいることになる。

また、地名がない歌も、9は「梅」が詠まれているので天平以降の作であろうが、花ではなく、そこにとまった鶯が主題である。その羽が白くなるほど「沫雪」が降る様子が詠まれている。12も、愛しい夫を今か今かと待って外に出てみれば、庭には「沫雪」がまだらに降っていると詠む。14の柿本人麻呂之歌集歌も、「沫雪」よ千重に降り敷けと歌いかけ、これをよすがとして恋しい人を偲ぼうという内容である。これらの歌の「沫雪」も「泡立つように勢いよく降る雪（水雨）」と解釈することができる。

奈良県の山沿いの地域は降雪も多いが、奈良盆地の積雪はさほど多くはなく、一方、筑紫は九州ではあるが日本海に面しており、積雪は意外に多い。八世紀頃は現在よりも全体に温暖だったともいわれており、<sup>18</sup>現在の感覚では論じられないが、少なくとも平城京と大宰府の雪景色が同等であったとはいえないように思われる。

しかし、特に10と14の柿本人麻呂之歌集歌は旅人に先行する歌と思われ、旅人が「沫雪」の「千重零敷」くさまから恋しい人を「見<sup>み</sup> 偲<sup>しのほ</sup>」という14を意識して作歌することは考えられる。すなわち、眼前の景が平城京とは異なっていたとしても、旅人にとっては「沫雪」の歌の持つ背景を「二次的な自然」として知覚し、大宰府にいなながら「沫雪」が「保<sup>ほ</sup> 杼<sup>とろ</sup> 呂<sup>ほ</sup> 保<sup>とろ</sup> 杼<sup>に</sup> 呂<sup>ふり</sup> 零<sup>り</sup> 敷<sup>し</sup>」く様子を詠むことができたのであると考える。12や14の相聞歌中の「沫雪」が「零<sup>ふり</sup> 敷<sup>し</sup>」く様子の表現は、望郷の念に置きかえられ、その激しい思いが募っていくことが表出されていると考えられる。

「沫雪」の歌の作者をみておくと、1 駿河采女、2 大伴村上、4 角広弁、5 紀小鹿女郎、6 大伴坂上郎女、7 大伴田村大嬢、8 大伴家持であり旅人以降の大伴氏周辺の歌人たちに集中している。集中の歌がすべてではなかっただろうが、少なくとも、「沫雪」を大伴氏周辺の人々が好んで倭歌の語として選択し、「梅」との取り合わせ表現などを形成していったといえる。これも、前述のような旅人の雅な歌作があったからではなかったかと思われる。

「平城京師所念可聞」ならのやかしおもほゆるかきは、倭歌の語や表現としてあらわれた「沫雪」の語とこれを含む歌が「二次的な自然」としての景となって平城京の記憶を呼び覚まし、その上で詠まれたための表現であったと考える。

## 五、おわりに

以上のように、集中の十五例から、やわらかいことを「アワ」といい、やわらかい雪という意味で「アワユキ」といったが、「沫雪」の字をあてたことで、その用字から「泡立つように勢いよく降る雪（水雨）」という意味が付加され、これに引かれて冬の雨として植物へ働きかけるといふ「しぐれ」や「露」「霜」の類似表現を用いる発想が生まれて、それが巻八に特徴的にみられる冬の季節感を伴う表現となっていたと考えた。

また、「沫雪」は、熟語として漢籍に用例が見出せないことから、倭語として形成された熟語であったと考えた。これにより、「沫のような雪」という意味が付加され、水泡のように「はかない」という意味が生じて、後世には「淡雪」と混用混同されていたと思われる。

以上、巻八・巻十の四季分類歌巻の歌から「沫雪」の例だけを取り上げて、集中の自然表現について考察した。持統朝頃に中国の暦日意識が流入し四季の概念を新たに獲得した際に、まず漢文表現を規範として取り入れ、語の取り合わせによるイメージの喚起などにより大和の四季観に基づく自然表現を形成していったと考える。

※『万葉集』の本文は、鶴久・森山隆編『萬葉集』（おうふう）に拠り、訓の一部を私に改めた。『古事記』『日本書紀』は『日本古典文学大系』（岩波書店）に拠った。

[注]

- (1) 中西進「万葉集の自然」『万葉集研究』塙書房・第5集（昭51）〜第9集（昭55）『万葉と海彼』および『中西進万葉論集 第八集』所収
- (2) 「倭歌」とは、万葉仮名（漢字）によってあらわされた歌という意味で、中古以降の定型化され仮名表記される「和歌」との区別を明確にするために用いた。
- (3) 例14の「阿和」は西本願寺本では「沫」と書かれている。「阿和」は元暦校本・類聚古集・紀州本（神田本）などによる。
- (4) 伊藤博『萬葉集釋注 四』集英社（平8）の一四二〇番歌の注。
- (5) 井出至『萬葉集全注 巻第八』有斐閣（平5）の一四二〇番歌の注。
- (6) 『源氏物語』若菜上に「はかなくて上の空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪」とあり、この時期以降「春」の雪として定着したか。
- (7) 大石泰夫「あわゆき（沫雪）」の項『万葉ことば事典』大和書房（平13）
- (8) 澤瀉久孝『萬葉集注釋 巻第八』中央公論社（昭36）など

(9) 堅庭者、於向股蹈那豆美、「三字以音。」如沫雪灑散而、伊都「二字以音。」之男建「訓建云多祁夫。」蹈建而、待問、何故上来。〔古事記〕上卷)

(10) 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 上代編』三省堂(昭42)

(11) 東茂美「園梅の景―梅花宴歌と梅花落―」『古代文学』二二号(昭和58)など

(12) 「色づく」は集中に二十九例を数え、卷八に六例、卷十に二十例ある。厚見王の歌(4・六六八)や天平四年作の高橋虫

麻呂歌(6・九七二)や遣新羅使人歌(15・三六九九)など、作歌年代のわかる例は天平以降に集中している。

(13) 沫雨、雨潦上覆瓮也、沫雨、或作流潦。〔淮南子〕説山訓の許慎注)

(14) 雪、冰雨説物者也。〔説文解字〕

(15) 井出至『万葉集全注 卷第八』有斐閣(平5)の一六三九番歌の項。

(16) 中西進『万葉集 全訳注原文付(二)』講談社文庫(昭55)

(17) 五言。初春侍宴。一首。

寛政情既遠。迪古道惟新。〔寛政の情既に遠く、迪古の道惟れ新し。〕

穆穆四門客。濟濟三徳人。〔穆々四門の客、濟々三徳の人。〕

梅雪亂殘岸。煙霞接早春。〔梅雪殘岸に亂れ、煙霞早春に接く。〕

共遊聖主澤。同賀擊壤仁。〔共に遊ぶ聖主の澤、共に賀く擊壤の仁。〕〔懷風藻〕四四)

(18) 鈴木秀夫『氣候変化と人間―一万年の歴史―』大明堂(平12)